

中国語の“V有(you)”構文の意味体系

—日本語の“Vテアル”構文との比較を通して—

黄 利 斌

要 旨

本稿において筆者は中国語の“V有”構文を典型的存在構文から拡張されたものとして捉え、日中対照の観点からその統語的、意味的特徴を考察した。その結果、中国語の“V有”構文には日本語の“Vテアル”構文に類似した多義性が認められ、対象がある状態で存在していることを表す「対象の存在様態」、過去の行為経験の効力が動作主に存在している「行為経験の存在」、時間と関係がない「単なる状態」といった意味用法が存在し、「行為経験の存在」という派生的な用法が基本的な用法である「対象の存在様態」から拡張されたことが明らかになった。“V有”構文は話者が行為の結果に関心を示す「結果相」の表現の一つであることを主張する。

【キーワード：存在構文／結果相／意味機能／アスペクト／日中対照】

1 はじめに

本稿は、現代中国語の“V有(you)”構文を典型的存在構文¹から拡張されたものとして捉え、その統語的、意味的特徴を考察し、“V有”構文は動作・行為の結果としてもたらされる状態に重点が置かれる「結果相²」の表現であることを主張するものである。“V有”構文とは、次の(1a)(2a)が示すように、動詞の直後に日本語の「ある」に相当する存在・所有動詞「有」が付加され、動作・行為の結果としてもたらされる状態が存続していることを表す表現である。

- (1) a. 就 在 墙上 画 有 一个 小三角形 和 一串
すると に 壁上 書く ある 一つ 小さな三角形 と 何本か
短短 的 细线 的 下面, 划添 了 两条 线。
短い の 細い線 の 下 書き足す 完了相 二本 線

b. 壁に書いてある小さな三角形と何本かの細い線の下に、線を二本書き足した。

(彷徨³)

- (2) a. 石头上 刻 有 一些 字。
石の上 刻む ある 幾つか 字

b. 石に字が幾つか刻んである

(中国語辞典⁴)

先行研究では、中国語の“V有”構文は個別言語におけるアスペクトの問題と関連付けて論じられてきたが、その意味機能をより明らかにするには、他の言語との比較・対照が有効である。例えば、日本語の“Vテアル”構文も、次の(3a)(4a)が示すように、動詞のテ形に存在・所有動詞「ある」が接続して、「行為の結果としてもたらされる状態を表す表現」(益岡1987:219)である。

(3) a. 封筒の裏に石田玲子という名前が書いてあった。

b. 信封后面 写 有 石田玲子 的 名字。

封筒の裏 書く ある 人名 の 名前 (『ノルウェイの森』)

(4) a. 襖は金粉がちりばめてあった。

b. 隔扇上面 嵌 有 金粉。

襖 上 鏤める ある 金粉 (『雁の寺』)

中国語の「有」も日本語の「ある」も、本動詞として存在・所有という意味を表すとともに、アスペクト助詞としての機能を備えている。両者は形式的にも機能的にも類似しており、対応関係が見られるが⁵、「V有」構文と「Vテアル」構文に関する対照研究は、筆者の知る範囲では見つけることはできなかった。本稿は、「V有」構文と「Vテアル」構文を比較することによって、「V有」構文の意味の解明に一石を投じるものである。主な目的は以下の2点である。

(i) 中国語の「V有」構文が表す意味を記述し、各意味用法の関係を考察する。

(ii) 中国語の「V有」構文と日本語の「Vテアル」構文との相違を明らかにする。

2 先行研究と本稿の立場

2.1 先行研究

これまで、「桌上放了/着一本书(机の上に本が置いてある)」のような基本アスペクト形式とされている「V了(le)」構文、「V着(zhe)」構文についての考察は多く行われてきたものの、周辺のアスペクト形式である「V有」構文に関する研究は未だに少ない。「V有」構文に関する主要な研究としては詹(1981)、孫(1996)、石(2004)などが挙げられる。

詹(1981)は、「V有」について、「動詞+着/了」の変異体と見なすことができると指摘している。つまり、詹は「V有」が「V了」、「V着」に相当すると見なし、「有」をアスペクト形式の一つであると認めている。そして、石(2004)はLangacker(1991)を参照し、「有」について存在・所有動詞から完了相(perfect aspect)に文法化された認知基底を述べ、そのアスペクト的用法を指摘している。また、羅・範(2006)は、「有」を「了」、「着」と比較し、「有」が準アスペクト助詞であると指摘している。つまり、詹(1981)、石(2004)、羅・範(2006)は「有」がアスペクト助詞であるという立場に立っている。

これに対して、孫(1996)は、存在構文としての「V有」構文の存在を指摘したうえで、動詞Vが本動詞の機能で、「有」は「結果補語标记(結果補語標識)」だと述べている。また、呂(1999: 630)は、「有」は「用在动词后面、结合紧凑、类似一个词(動詞の後ろに使われて緊密に結合され、一つの語のような使い方になっている)」と述べている。つまり、孫(1996)、呂(1999)は「有」をアスペクト助詞ではなく、一つの結果補語だと主張している。このように、先行研究では、主に「有」がアスペクト助詞であるか否かを巡って議論されているが、「V有」構文が表す意味の総体について詳しい説明はなされていない。

一方、日本語の「Vテアル」構文については、益岡(1987)は構文の「内的連関」に注目し、

統語的・意味的観点から“Vテアル”構文を、「対象指向性」をもつ「対象がガ格で表されるA型」と「行為指向性」をもつ「対象がヲ格で表されるB型」という二つの型に分け、各型をさらにA₁型、A₂型とB₁型、B₂型に区分している⁷。そのうえ、「テアル表現の全体像はA₁型から、A₂型、B₁型を経てB₂型に至る、1つの連続体を構成している」(p.232)と分析している。杉村(1996)、原沢(2005)なども基本的にその分類を採用している。これらの先行研究に従い、本稿も基本的に“Vテアル”構文を対象に焦点が置かれるA型と行為に焦点が置かれるB型に分類する。

A₁型：行為の結果もたらされる、対象の或る場所での存在を描写するタイプ(例5)

A₂型：或る行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、視覚可能な形で存続していることを描写するタイプ(例6)

B₁型：行為の結果もたらされる事態が基準時において引き続き存在しているという、「結果の事態の存続」を表すタイプ(例7)

B₂型：単に、行為の結果が基準時(及び、それ以降)において何らかの有効性⁸を示すという意味での結果相を表すタイプ(例8)

(5) 盆栽が幾鉢かならべてあった。(益岡1987:221)

(6) 入口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある。(益岡1987:223)

(7) 業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり……(益岡1987:224)

(8) それで、京都府警に鑑定をたのんである。(益岡1987:225)

A型とB型の区別に関しては、形式上では、A型は対象がガ格で示され、B型は対象がヲ格で示されている。意味としては、A型では話者は動作主の行為よりも対象の存在・変化に関心をもつものに対して、B型では話者は対象の存在・変化よりも動作主の行為に関心をもつと考えられる(杉村1996:64)。また、A₁型とA₂型の区別としては、前者は対象の存在を描写するタイプであり、場所項が現れるものに対して、後者は対象の変化の状態を描写するタイプで、一般に場所項が現れない。B₁型とB₂型の違いは、対象の状態の存続の有無というところにある。前者は対象の状態が存続していることを表すものに対して、後者は単に行為の結果が基準時において何らかの有効性を示すという意味である。

益岡(1987)の分類を受け継ぎ、認知言語学の観点から“Vテアル”構文を記述したのが岡(2001)である。岡(2001)は“Vテアル”構文を中心的存在構文からの拡張として捉え、「存在様態型構文」、「結果存在型」、「行為存在型」などと分けている。“Vテアル”構文を「中心的存在構文」からの拡張として捉え、認知言語学的な観点から考察するところに岡の特徴がある。

中心的存在構文：空間的場所に実体が存在するタイプ

存在様態型構文：空間的場所Yに実体Xがある状態で(Vテ)存在するタイプ

結果存在型：存在様態型構文が場所の二格と共起せず、Vテという動作様態の意味に焦点がソフトされるタイプ

行為存在型：直接的結果や痕跡もなく出来事と現在の発話が関連付けられているタイプ

(9) 机の上に本がある。(岡2001:133)

- (10) 机の上に本が置いてある。 (岡2001:133)
 (11) 窓が開けてある。 (岡2001:133)
 (12) 次の大会のために、毎日5時間走ってあるから、大丈夫です。 (岡2001:138)

2.2 本稿の立場

本稿では、「有」が他のアスペクト助詞と共に起できないことに鑑み、「有」をアスペクト助詞と仮定し、「V有」構文を「結果相」の表現と捉え、存在論的観点から「V有」構文を考察する。すなわち、「アスペクトを状況のあり方=存在様相を述定する仕方の一つとして捉える」(岡2001:132)という立場に立ち、「V有」構文を典型的存在構文からの拡張と捉え、その統語的、意味的特徴を明らかにする。本稿は、「動詞V+有」という形式を有する「V有」構文を研究対象とし、「拥有(もっている)」、「含有(含んでいる)」、「帶有(帯びている)」など、既に語彙項目として辞書に記載されたものについては考察対象としない。

研究方法として、コーパスを用いて実例による分析を行う。『中日対訳コーパス⁹』における「V有」構文の用例数はそれほど多くないため、『人民网报刊杂志搜索¹⁰』(人民網新聞雑誌検索)も用いる。その中にある10年間(2006年1月1日から2015年12月31日まで)の記事を対象に、『漢語動詞用法辞典』(孟琮他編1999)に挙げられた1223個の基本動詞の直後に「有」をつけてキーワードとして検索し、抽出した実例を日中対照の視点から分析する。3節以降の構成は以下の通りである。3節においては、中国語の「V有」構文の統語的特徴を考察する。4節では、「V有」構文をI型とII型に分け、その意味的特徴を考察し、「V有」構文が表す意味を明らかにする。5節では、日本語の「Vテアル」構文と対照して、中国語の「V有」構文と日本語の「Vテアル」構文の共通点や相違点を探る。6節では、本稿のまとめを述べる。

3 “V有”構文の統語的特徴

中国語「V有」構文は基本的に「NP₁+V有+NP₂」という構造を有し、主格の位置に対象が来るか動作主が来るかによって、次の二つの型に分かれる。

(I) L (Location= 場所) +V有 +P (Patient= 対象)

- (13) 桌上 放 有 一本 语言学的书。(机の上に言語学の本が置いてある。¹¹)

机の上 置く ある 一冊 言語学の本 (作例)

格標示 (主格)

意味役割 (対象)

(II) A (Agent= 動作主) +V有 +P (Patient= 対象)

- (14) 我们 拍 有 照片 呢。(私たちは写真を撮ってあります。)

私達 撮る ある 写真 モダリティ (中国語辞典¹²)

格標示(主格) (対格)

意味役割 (動作主) (対象)

文(13)は存在の状態を表す場面描写であり、「小李在桌上放了一本语言学的书(李さんは机の上に言語学の本を置いた)」という能動文と比べ、統語的に、対象である「书(本)」が主格に昇格し、動作主である「小李(李さん)」は削除される。意味的にみて、動作主の行為よりも、対象の結果状態に焦点が置かれていると言える。ここでは、これをI型とする。これに対し、文(14)は(13)と異なり、存在の状態を描写してはいない。動作主である「我们(私達)」が明示されて主格の位置に立ち、対象である「照片(写真)」は対格の位置にある。動作主が明示されて主格の位置に立つことから、行為の結果が問題にされるだけではなく、行為自体にもある程度焦点が置かれていると考えられる。これをII型とする。従来の“V有”構文に関する研究では、主に存在構文の枠組みでI型が焦点を当てられ(孫1996;王2011他)、II型については十分に検討されていない。

I型の“V有”構文とA型の“Vテアル”構文においては、両方とも対象が主格の位置にあり、動作主の出現を抑制し、話者の関心は対象にある。一方、II型の“V有”構文とB型の“Vテアル”構文においては、共に動作主が顕在化されて主格の位置に立ち、対象が対格の位置にある。益岡(1987)や杉村(1996:64)はB型の“Vテアル”構文は行為描写文の一種で、話者は対象の存在・変化よりも動作主の行為に関心をもつと分析している。これはII型の“V有”構文についても同じことが言える。つまり、基準時(及び、それ以降)において行為の有効性が引き続き存在しているという意味を表す。以上の点から考えると、“V有”構文と“Vテアル”構文は統語的特徴において非常に類似していると言える。

4 “V有”構文の意味的特徴

4.1 I型の“V有”構文

3節で述べたように、I型の“V有”構文は「L(Location=場所)+V有+P(Patient=対象)」という構造をもつ。この場合、存在動詞「有」が中心的な働きをなし、動詞Vが二次的なものである。I型では、NP₁が典型的な場所名詞であり、動作主が完全に背景化され、話者の関心は目の前の対象にある。構文全体として、問題にされているのは動詞の表す動作の結果としてもたらされる対象の存在の状態である。ここでは、「対象の存在様態¹³」と呼ぶことにする。「対象の存在様態」を表す“V有”構文は典型的存在構文に一番近く、広義の存在表現だと考えられる。その根拠として、以下の2点が挙げられる。

まず、場所項は動詞Vではなく、存在動詞「有」が要求して出現する。文(15a)では、「疊(畳む)」という動詞の意味には場所が必須項として指定されておらず、場所項「壁橱里(押入れの中)」が現れたのは存在動詞「有」が要求するからであると考えられる。例えば、(15b)のような「疊(畳む)」を省いた文が成立するのに対して(15c)のような「有」を省いた文は不自然になる。

- (15) a. 壁橱里 疊有 被子。
 押入れの中 畳む ある 布団
 (押入れの中に布団が畳んである。)
- b. 壁橱里 有 被子。

押入れの中 ある 布団

(押入れの中に布団がある。)

c. *壁橱里 叠 被子。

押入れの中 畳む 布団

(作例)

もう一つの根拠は、典型的存在構文からなる問いの文に対して、“V有”構文が自然に用いられるという事実に求められる。

(16) 一桌上 有 什么?

机の上 ある 何

(机の上に何がありますか?)

一a. (桌上) 有 一本书。 / b. (桌上) 放 有 一本书。

机の上 ある 一冊の本 机の上 置く ある 一冊の本

((机の上に) 本がある。) ((机の上に) 本が置いてある。)

(作例)

典型的存在構文からなる問いに対し、“V有”は典型的存在構文と同様に自然な答えが成り立つことから見れば、このタイプを広義の存在表現の一種と見なすことは正当だと考えられる。文(16a)の「机の上に本がある」という文においては、本の存在だけを述べているが、どのような状態で存在しているかという問題については言及されていない。(16b)の「机の上に本が置いてある」という文においては、本は散らかしている状態で存在しているのではなく、「置いた」状態で存在しているというニュアンスが含まれている。また、「墙上贴有一幅画(壁に絵が貼ってある)」のように、壁に絵が存在していることを表すだけではなく、どのような状態で存在しているのかも説明されている。すなわち、絵は掛けられているのではなく、描かれているのではなく、壁に貼られている状態で存在している。「対象の存在様態」を表す“V有”では典型的な存在表現と比べ、客体の存在様態がより具体的に規定されていると言える。

ところで、I型の“V有”構文には次のように、性質のやや異なる文が存在している。文(17)は、眼前描写ではなく、対象が観察できない抽象的なものであり、時間性をもたない知識表現である。このような表現をここでは、「単なる状態」と呼ぶ。「単なる状態」は具体的な動作や行為は感じさせずに、ものの属性や状態を語る表現である。文(17)では、存在動詞「有」の文法化の度合いはそれほど高くないため、存在の意味は強く残されている。「包含(含む)」は存在の在り方を規定する比喩的な表現だと捉えることも可能である。つまり、「現代政治文明(現代の政治文明)」という抽象的な場所に「四个主体要素(四つの主体要素)」が存在している意味を表す。「対象の存在様態」用法の一種だと考えることができる。

(17) 现代政治文明 包含 有 政党、国家、市场与社会 四个主体要素。

現代の政治文明 含む ある 政党、国家、市場と社会 四つの主体要素

(現代の政治文明には政党、国家、市場、社会という四つの主体要素が含まれている。)

(人民日報2014-09-04)

4.2 II型の“V有”構文

II型の“V有”構文は「A (Agent) +V有+ P (Patient)」という基本構造をもち、動作主が明示されて主格の位置にあり、対象は対格の位置に生起する。II型における「有」はI型における「有」より存在の意味が抽象化され、基本アスペクト形式とされている「了」と同じように、アスペクト的な意味を表す機能語的な性質をもつに至っていると見なすことができる。構文全体としては、具体的な対象の存在ではなく、基準時（及び、それ以降）において動作・行為の有効性が引き続き存在しているという意味を表していると言える。ここでは、「行為経験の存在¹⁴」と呼ぶことにする。

(18) 安置点 负责人 掌握 有 安置点内 所有群众的受灾情况……

避難所 責任者 把握する ある 避難所内 全ての人々の被災状況

(避難所の責任者は避難所内の人々の被災状況を把握している。……)

(京華時報2010-04-17)

(19) 新闻中心 为 记者 准备 有 午餐和晚餐。

ニュースセンター のために 記者 準備 ある 昼食と夕食

(ニュースセンターのスタッフは記者たちのために昼食と夕食を準備してある。)

(人民日報2014-11-05)

(20) ? 安置点负责人有安置点内 所有群众的受灾情况……

(21) * 新闻中心为记者有午餐和晚餐……

(22) 安置点负责人已经掌握有安置点内所有群众的受灾情况…略…

(23) 新闻中心已经为记者准备有午餐和晚餐……

文(18)(19)では、I型の“V有”とは異なり、参照点となる具体的なものは目の前に存在しておらず、話者の知識、判断などによって、過去の行為経験の効力が基準時（及び、それ以降）において存在していることを表す。動詞「掌握（把握する）」、「准备（準備する）」を省いた文は不自然、あるいは非文であるという点から見れば、このタイプの「有」は広義の存在を表すのではなく、動詞Vが中心的な役割を果たし、「有」はアスペクト助詞と分析できる。この場合、「有」はアスペクト助詞「了」に相当する機能をもつ。また、文(22)、(23)のように、「已经（既に）」のような時を明示する副詞的成分を付け加えることができることも、このタイプの“V有”構文が先行する事態と基準時とを関連付ける完了相の用法として分析できることの一つの証拠になる。

「行為経験の存在」を表す“V有”は存在場所が典型的な場所名詞である「対象の存在様態」と違って、具体的なものが具体的な場所にある状態で存在していることを表すのではなく、過去の行為経験の効力が動作主という抽象的な場に引き続き存在していることを表す。ここでは、動作主を経験主と理解することもできる。「～シタコトガアル」という構文に近いと考えられる。

最後に、「対象の存在様態」と「行為経験の存在」の中間的存在として、NP₁が団体や組織を表現する名詞句の場合がある。その際、NP₁を物の存在の場所と捉えるか動作・行為を引き起こした動作主と捉えるかによって、“V有”の表す意味が変わる。孫(1996)もこのような中間的存在を認めている。例文(24)のように、仮に「店舗(店舗)」を、ものが存在している物理的な存在場

所として捉えるのならば、訳文1のように対象の結果状態の存在を描写していると理解できる。これに対し、「店舗（店舗）」を擬人化して、行為の動作主（店の持ち主など）として捉えるのならば、訳文2になり、訳文1と比べて対象の結果状態が問題にされるだけではなく、動作主が明示されていることによって、行為自体にも重きが置かれることになる。

- (24) 街両側の店舗都安有音响。
 道路両側の店舗全て設置するあるステレオ
 道路両側にある全ての店舗にはステレオが設置されている（訳1）
 道路両側にある全ての店舗はステレオを設置している。（訳2）

4.3 “V有”の表す意味の連関

上述の“V有”構文の各用法の使用実態を把握するため、新聞コーパスから無作為に200件の実例を抽出し分析した。“V有”構文の各意味用法の分析結果を表1に示す。

表1 “V有”構文の使用状況

	対象の存在様態	行為経験の存在	中間的存在	単なる状態	計
“V有” 構文	161 80.5%	21 10.5%	6 3%	12 6%	200 100%

表1に示したように、“V有”構文においては、「対象の存在様態」という意味の出現率が一番高く（80.5%）、大半を占めている。出現率から推測する限り、「対象の存在様態」が基本的用法であるといえる。「行為経験の存在」と「単なる状態」という二つの意味用法はそれぞれ10.5%と6%に留まり、使用頻度はそれほど高くない。よって、出現率から推測する限り、これらは副次的あるいは派生的な用法と考えられる。

それに加え、4.1節で述べたように、I型の“V有”構文（「対象の存在様態」）に現れる場所項は動詞Vによるものではなく、「有」によるものである。また、典型的存在構文からなる問いの文に対して、“V有”構文は典型的存在構文と同じように自然に用いられる。典型的存在構文との近さから考えると、II型の“V有”構文（「行為経験の存在」）と比べ、I型の“V有”構文は基本的な用法であることが言える。さらに、副島（2007）は動作主や時を表す副詞成分などの条件の限定が少ないことからA型の“Vテアル”構文が基本的な用法であると分析している。例えば、(25)、(26)では、それぞれ動作主「谷口」と副詞成分「一昨日」などの条件がつけられている。

(25) 谷口がレンタカーを借りて、近くに停めてあるのだ。 (副島2007:168)

(26) 「しまった！」と思わず声を上げたのは、昨日の夕食と一緒に、と一昨日、谷口と約束してあったのだ。 (副島2007:168)

副島（2007）を参考に、“V有”については、I型の“V有”構文はII型の“V有”構文より使用頻度が圧倒的に高く、動作主や時を表す副詞成分などの限定的な条件が現れないことから、前者

は基本的な用法であり、後者は派生的な用法であると考えられる。これは人間の認知プロセスにも一致している。つまり、人間は具体的なものから抽象的なものへと認識を拡張していく。

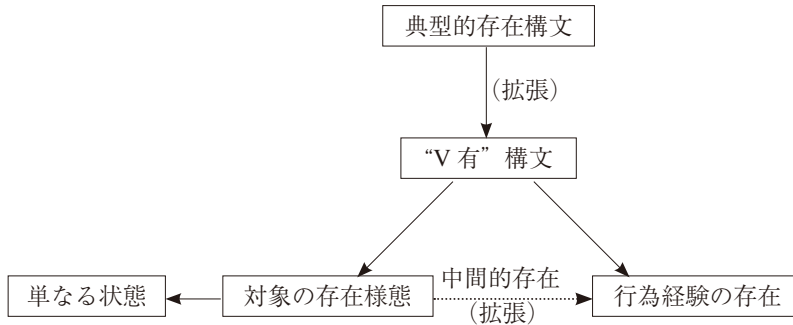


図1 “V有”構文で表される意味の拡張関係

5 “Vテアル”構文との対照

5.1 I型の“V有”構文とA型の“Vテアル”構文

日本語において、「机の上に本が置いてある」のような場所項を伴うガ格の“Vテアル”構文（A型の“Vテアル”構文）は「机の上に本がある」のような典型的存在構文に近い。「置く」という行為によって、テーブルの上に本があるという結果になるが、ここでは、本の存在の状態というところに注目されており、「置く」行為は二次的なものであり、広義の存在表現であると考えられる。動作主が完全に背景化され、動作・行為による結果として捉えるより、存在の状態を表す場面描写として捉えられやすい。つまり、ある場所に対象が動詞Vの表す動作によってもたらされる結果状態で存在しているという意味を表している。

I型の“V有”構文とA型の“Vテアル”構文の間には、使用される動詞Vに関しても、共通性が認められる。中国語の新聞コーパスを調査した結果、抽出された22265件の“V有”構文の例に使用されていた動詞の異なり語数は157語である。紙幅の関係で、出現数が100回以上の動詞のみを表2に示す。

表2では、出現頻度が上位1～5位の動詞:「印（印刷する）」、「装（付ける）」、「存（預ける）」、「留（残す）」、「写（書く）」は全て主体動作・客体変化動詞である。この5つの動詞は延べ件数が一万件を超え、全体の半分以上を占めており、かなり高頻度で使われている。角田（2009:67-93）は他動性の判断基準として、意味上では「動作主の対象に対する働きかけの有無」と「対象の変化の有無」という2点を指摘している。角田（2009）の観点に従い、「印（印刷）」、「装（付ける）」、「存（預ける）」などの動詞は全て他動性の高い動詞と判断できる。つまり、“V有”に用いられ易いのは他動性の高い動詞である。

これに対して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）より“Vテアル”構文の例文を

表2 “V有”と共起する動詞の出現数

順番	動詞	出現数	順番	動詞	出現数	順番	動詞	出現数
1	印(印刷する)	3028	11	放(置く)	312	21	绣(刺繍する)	154
2	装(付ける)	2900	12	包含(含む)	310	22	沾(つける)	141
3	存(預ける)	2686	13	签(署名する)	283	23	包括(含む)	133
4	留(残す)	2271	14	出版(出版する)	230	24	保留(残す)	132
5	写(書く)	1771	15	画(描く)	211	25	堆(積む)	121
6	标(標記する)	1237	16	立(立てる)	193	26	涂(塗る)	120
7	犯(犯す)	885	17	长(生える)	188	27	混(混ぜる)	118
8	贴(貼る)	847	18	开(開ける)	179	28	住(住む)	115
9	盖(覆う)	500	19	生(生える)	164	29	停(停める)	102
10	挂(掛ける)	439	20	保存(保存する)	156	30	埋(埋める)	101

1000例無作為抽出して分析した結果、“Vテアル”構文に用いられる動詞の異なり語数は293語である。紙幅の関係で、出現数が5回以上の動詞のみを表3に示す。

表3 “Vテアル”と共起する動詞の出現数

順番	動詞	出現数	順番	動詞	出現数	順番	動詞	出現数
1	書く	159	”	作る	8	”	積み上げる	6
2	置く	101	”	載せる	8	”	祀る	6
3	掛ける	17	”	巻く	8	”	植える	6
”	止める	17	”	示す	8	28	切る	5
5	貼る	16	17	立て掛ける	7	”	引く	5
6	用意する	15	”	吊るす	7	”	安置する	5
7	記する	12	”	取る	7	”	分ける	5
8	入れる	10	”	立てる	7	”	掲げる	5
”	隠す	10	”	取り付ける	7	”	据える	5
10	並べる	9	”	飾る	7	”	描く	5
”	彫る	9	”	張る	7	”	使う	5
12	しまう	8	24	敷く	6	”	仕掛ける	5

表3では、表2で示した中国語の場合と同様に位置変化または状態変化を表す主体動作・客体変化動詞が多く使われ、中でも、「書く」と「置く」はかなり高い頻度で使われている(260例、26%)。行為の結果として、対象がある状態で存在していることが表されている。したがって、“Vテアル”構文においても、「対象の存在様態」を表す用法が基本的な用法であると考えられる。これについては、李(2007:18)も同じ見解を述べている。つまり、I型の“V有”とA型の“Vテアル”の間に対応関係が見られることになる。具体的な用例を見ても、文(27)～(29)に示されるように、『中日対訳コーパス』から抽出された22例の対訳例文では全て「対象の存在様態」の意味が与えられている。

(27) a. 窓際に机と椅子が置いてある。

b. 窗边安有桌椅。

(『あした来る人』)

(28) a. ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです。

b. 而在那帽子里面一小方菱形的白布上，清清楚楚地写有那人的名字。 (『こころ』)

(29) a. 襖は金粉がちりばめてあった。

b. 隔扇上面嵌有金粉。 (『雁の寺』)

ただし、A型の“Vテアル”構文には場所項がシフトされず、対象の結果状態が存続していることを表す用法も存在している。岡(2001)がいうところの「結果存在型」である。これに対して、I型の“V有”構文にはそのような用法はない。例えば、文(30a)のような「結果存在型」に相当する用法は“V有”構文には存在しない。動詞Vではなく、「有」を中心としているI型の“V有”構文には常に物や人の位置変化又は出現(状態変化)という意味が含意されている。位置変化や出現(状態変化)は常に場所項を要求するのは「有」の基本語彙素によるものだと考えられる。大堀(2005:4)で挙げられている文法化の度合いを判断する基準に照らして、“Vテアル”構文に生じた「テアル」に比べ、“V有”に生じた「有」の意味・機能は具体的である。加えて、「有」の表示の義務性は随意的である¹⁵という点からも、「テアル」と比べ、「有」の文法化の度合いはそれほど高くないと言える。

(30) a. *窗 开 _____ 有。 (cf. 窗 开 了 / 着)

窓 開ける ある 窓 開ける 完了相 継続相

b. 窓が開けてある。 (作例)

しかしながら、“V有”には例(17)のような「単なる状態」の用法もあるが、“Vテアル”の場合は「単なる状態」が表現できない。「道路が曲がっている」や「駅前に高層ビルが集まっている」のような「単なる状態」の描写は、日本語では“Vテアル”ではなく、「Vテイル」で表される¹⁶。

5.2 II型の“V有”構文とB型の“Vテアル”構文

II型の“V有”構文とB型の“Vテアル”構文は「行為経験の存在」を意味している。B型の“Vテアル”構文は動作・行為を行った動作主が顕在化され、対象がガ格ではなく、ヲ格で示されている。文脈上動作主が省略される場合も少なくないが、対象がヲ格で示されるので、動作主が話者にとって存在していると判断できる。文(31)は動作主「僕」が顕在化され、文(32)は動作主が潜在化されている。対象がヲ格で示されていることから、話者の関心は対象ではなく、「飛行機の予約をした」、「鑑定を頼んだ」という動作・行為にあると言える。「行為の結果が基準時において何らかの有効性(益岡1987:226)」を示している。また、「すでに」「とっくに」などのような動きの時点を示す副詞的成分と共起できることも「行為経験の存在」を完了相の用法と考えることを裏付けている。

(31) 僕は飛行機の予約をしてあるのだ。 (副島2007:161)

(32) それで、京都府警に鑑定をたのんであるの。 (益岡1987:225)

しかし、同じ「行為経験の存在」であっても、“V有”と“Vテアル”において相違点を見るこ

とができる。例えば、(33) に示されるように、視覚的に確認できない結果状態をもたらす動詞は普通に“V テアル”構文に用いられるが、“V 有”構文には用いられない。文(33a) に対して、(33 b) のような“V 有”は使えない。『中日対訳コーパス』においても、益岡(1987) でのいう B₂ 型の“V テアル”構文に対応中国語訳は“V 有”構文ではなく、“V 了”構文や他の表現になっている。この点からも、“V 有”構文の「有」は意味・機能は具体的であり、文法化度合いが「テアル」より低いと言える。“V 有”構文は動作終了後、結果状態の存在が求められる。

(33) a. 上京する時間は言ってあったのですが、…… (益岡1987:225)

b. *我 说 有 上京的时间。

私 言う ある 上京の時間 (作例)

以上をまとめると、“V 有”構文と“V テアル”構文に用いられる動詞の中で、一番多いのは位置変化または状態変化を表す主体動作・客体変化動詞である。これも、両構文においては「対象の存在様態」が基本的な用法を裏付けている。“V 有”構文と“V テアル”構文との間に意味用法に関する共通点が存在しているものの、相違点も否定できない。両者の意味用法の異同を表4に示す。

表4 “V 有”構文と“V テアル”構文の意味体系

	“V 有”構文	“V テアル”構文
対象の存在様態	○	○
行為経験の存在	○	○
結果の存在	×	○
単なる状態	○	×

6 おわりに

本稿では、日本語の“V テアル”構文と対照することによって、“V 有”構文の統語的、意味的特徴がより明確になった。すなわち、筆者は中国語の“V 有”構文は動作・行為の結果としてもたらされる状態に重点が置かれる「結果相」の表現であると主張した。“V 有”構文は“V テアル”構文と同様に多義性を有し、「対象の存在様態」、「行為経験の存在」、「単なる状態」といった意味用法が存在している。本研究では、「対象の存在様態」は基本的用法であり、本動詞「有」の特徴を最も色濃く残しているが、「行為経験の存在」は「対象の存在様態」から派生した用法であり、意味・機能がより抽象化されていることが確認できた。ただし、“V 有”構文には“V テアル”構文のような「結果存在型」の用法が存在しない。一方、“V テアル”構文には“V 有”構文のような「単なる状態」の用法は許されない。

本稿におけるアスペクトの周辺的なものとされている“V 有”構文に生じた「有」に関する分析は中国語のアスペクト体系の解明に貢献することに加え、外国人学習者に対するより効果的な中国語教育にも資することができると考えられる。

注

- 1 本稿では、“桌上有一本书 (机の上に本がある)”のような実体の存在を表す構文を典型的存在構文と呼ぶ。
- 2 「結果相」は益岡 (1987) の用語である。
- 3 本稿で挙げられた文学作品の用例は全て『中日対訳コーパス』(第一版) から抽出したものである。そして、下線はすべて筆者によるものである。
- 4 伊地智編 (2002)、白水社。
- 5 『中日対訳コーパス』には“V有”と“Vテアル”の対訳例は22例あった。
- 6 構文の「内的連関」については、益岡 (1997:182) に「一つの構文が表す意味の広がりの中にどのような秩序が認められるかを問題にするものである」という記述がある。
- 7 「対象指向性」と「行為指向性」は益岡 (1987) の用語である。前者は対象の状態存続に焦点が置かれ、後者は行為の結果だけではなく、行為自体にも重さが置かれる。
- 8 「有効性」とは、行為が終わった後、先行する行為の効力 (影響) が設定された基準時 (及び、それ以降) に引き続き存在していることを表す。なお、一般に、基準時は発話時を指す。
- 9 『中日対訳コーパス』(第一版) には文学作品と文学作品以外のものが収録されている。文学作品は中国語原著23篇、日本語原著22篇とその訳本を合わせて105篇 (約1130.3万字) である。文学作品以外は中国語原著14篇、日本語原著14篇、日中共同のもの2篇とその訳本を合わせて45篇 (約574.6万字) である。
- 10 『人民网报刊杂志搜索』(人民網新聞雜誌檢索) には『人民日報』をはじめ、『京華時報』、『江南時報』などの20以上の全国紙の新聞記事が収録されている。新聞コーパスを用いた理由は、“V有”表現は話し言葉より書き言葉として圧倒的に多く使われている為である。
- 11 『中日対訳コーパス』以外の例文の日本語訳は全て筆者によるものである。元仙台市立岩切小学校長の清水眞哉先生にその適格性を判断していただいた。心から感謝する。ただし、本稿の内容に誤りや問題点があれば、それは全て筆者の責任に帰するものである。
- 12 大東文化大学中国語大辞典編纂室編 (1994)、角川書店。
- 13 「存在様態」は岡 (2001) のVテイル・テアルの研究で、野村 (2003) のVテイルの研究で用いられる用語である。本稿でいう「対象の存在様態」は、これらの研究を参考している。
- 14 このような考えは金水 (2000)、岡 (2001) から学んだところが大きい。金水 (2000) はガ格に動作主がくるB型“Vテアル”構文における動作主は経験主体であり、「NP₂ (経験主) ハ [...V₁テ]_{VP}アル」という構造をもつと述べている。つまり、出来事がNP₂ (経験主) に存在していることを表す。これについては、II型の“V有”構文にも同じことが言える。
- 15 客体結果状態を表すには“V着”、“V了”のような他の形式も存在している。
- 16 国広 (1985: 8) はこれらの表現を「痕跡的認知」と名付けた。

参考文献

- 伊地智善継編 (2002) 『中国語辞典』白水社。
- 石毓智 (2004) 「汉语领有动词与完成体的表达」『语言研究』24:34-42。
- 王静 (2011) 「“NP₁+V+有+NP₂”类存在句研究」(修士論文) 復旦大学。
- 大堀壽夫 (2005) 「日本語の文法文化研究にあたって—概観と理論的課題」『日本語の研究』第1巻3号: 1-17。
- 岡智之 (2001) 「テイル (テアル) 構文の認知言語学的分析」『日本認知言語学会論文集』1:132-142。
- 金水敏 (2000) 「時の表現」『時・否定と取り立て』(仁田義雄・益岡隆志編) 岩波書店: 3-92。
- 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」『言語研究』: 1-19。
- 杉村泰 (1996) 「形式と意味の研究—テアル構文の2類型」『日本語教育』91:61-72。

- 副島健作（2007）『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房.
- 孫宏林（1996）「由“V + 有”构成的存在句」『世界汉语教学』36:21-29.
- 大東文化大学中国語大辞典編纂室編（1993）『中国語大辞典』角川書店.
- 角田太作（2009）『世界の言語と日本語（改訂版）』くろしお出版.
- 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて」『国語国文』8: 1-20.
- 原沢伊都夫（2005）「テアルの意味分析—意図性の観点から—」『日本語文法』5巻1号:20-38.
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版.
- 益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版.
- 羅建邦・範美群（2006）「从三个平面看“V有”和“V了”之差异」『江西科技师范学院学报』3:92-95.
- 李京保（2007）「『～テアル』文の構造及び意味用法」『東京外国語大学日本研究教育年報』11: 1-19.
- 呂叔湘（1999）『現代汉语八百词』商务印书馆.
- 詹开第（1981）「有字句」『中国语文』1:23-16.